

2020岡山市芸術祭

岡山市民の文芸

第52回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

友がひとつ卵を置いていったのだとしたら

高山秋津

きょう 一軒の家に
「売家」という幟が立った
八十歳を過ぎた友が
ひとり暮らしを止め
息子の住む街へ引っ越したのだ
生活が消えた家は蹲るように
ただ淡い影となっていた

すっかり背中が曲がってしまった彼女は
過ぎた日を畳むように視線を折り畳み
下ばかり見るようになった
建物も同じだ 年を取る
壁のひび 欠けた雨樋 扉の錆びた取っ手
けれど
噤んだガラス窓の向こうに
障子が真つ白なまぶしさを放っていたのだ
友の決意を見た

和紙を丁寧に切り揃え
ゆっくりゆっくり貼っていく
きのうに何度も引き戻されながら
見送った「時」に糊付けをして
棧に乗せていく
腰に手を当て
肩でほうと息をつき
出来上がりを眺めたに違いない
心に終止符が打てたのもこの時だろうか

わたしの裡をあかあかと染め上げて
白い広がり
やがて
大きな羽を持つ鳥となっていた
そこへ
友がひとつ卵を置いていったのだとしたら
わたしは
言葉の前に立ちつくし
孵化を
見届けなければならないのだ

◇岡山市教育委員会教育長賞

風に手渡すように

岩 藤 由美子

不意に
コンクリートの
地面に引つ張られ
顔や膝を
したたか
打ちつけた

地面から剥がした体で
ビスケットの厚みほどの
段差に
目を遣れば
遠い日が
駆けてくる

「転ばんように気をつけてな」
老いた母の家から
帰るとき
繰り返した言葉
母がどう返事をしたのか
もう思い出せない

気をつけても
転ぶときは
転ぶ
そんなこと
誰もが分かっていて
託しているんだ、きっと

「気をつけて」
今もどこかで
そつと
風に手渡すように
誰かと
誰かが
言い交わしているだろう

こんなに
短い言葉に
込められている
想いの深いことよ

◇岡山市教育委員会教育長賞

そらまえ

空前

山 本 照 子

私の古里は山懷にあつた。裾野から黒崎山へと向かう長い坂道の両側には、三十軒ほどの家が散在している。

その村落の頂きには、村人たちが「空前」と呼んでいる大きな屋敷があつた。代々、近隣の山の持ち主が住んでいるその家は、内部が見えないほどに高い漆喰の塀に囲まれていて、村人の人たちの憧れを集めていた。

小学校に入学したばかりのおかつば頭の私は、当時中学生だった空前の長男のうしろ姿を「お兄ちゃんお兄ちゃん」と呼びながら追いかけた。

村が雪に覆われるころになると、空前のお兄ちゃんは私を引きつれて、熊笹の生い茂る藪へと行った。小鳥を捕獲する「仕掛け罠」をつくるのだ。翌朝、小鳥たちのさえずりの中、朝日を浴びた罠には、ひとつの死が横たわっていた。雪の白、餌である南天の実の赤、竜のひげの実の青、それらの色彩が放つ、この世の光りに包まれて。

村中で一番空に近いから、空前と呼ばれているのだと気がついたのは、中学生のころだった。星空の下に浮かびあがっている、空前の屋敷を見上げる時、あれこそ「銀河鉄道の夜」に登場する始発駅だと、空想の羽をはたかせたものである。

古希を過ぎたころから、キャベツの葉を一枚一枚はがしていくように、新しい記憶が失われていく。そして古里で暮らした遠い日々があらわになってきた。なかでも、私に空想の楽しさを教えてくれた空前の漆喰の塀が、私に生と死はただの連なりにすぎないことを教えてくれたお兄ちゃんが、記憶の中の特等席で、スポットライトを浴びている。

もうすぐ、空前と言う始発駅から銀河鉄道に乗って、果てしない宇宙へと旅にでる。

キャンペーン

田房 正子

「キャンペーン」
何だろう この 心くすぐる響き
シールを集めて 必ずもらえるキャンペーン
まとめて お買い得キャンペーン
普段より 少し得した気分で うれしくなる
今 ちまたでブームになっているのが
「ステイホームキャンペーン」
活動外出を控えて お家で過ごそう
子どもたちにとっても 大人にとっても
絶好のチャンスの真ん中にいた人にとっても
何かにトライしようとしていた人にとっても
「いったん休止」の指示は
戸惑いと 焦りと もどかしさを募らせる
それでも 全員参加のキャンペーン
さあ これをどうする どうつなぐ
心と頭をほぐして 休息するもよし
次の 大ジャンプのための
イメージトレーニングをするもよし
したたかに 爪を研ぐもよし
ほらほら だんだん楽しくなってきた
キャンペーンというからには
そう長くは続かない 期間限定 今だけだ
シールを一枚ずつ集めるように地道に
お得にまとめて大胆に 思い思いのやり方で
今できることを 全力で紡ぐ
主婦のわたしも わたしらしく
冷蔵庫の中の 食材一掃でもしてみよう
しかめっ面の やっつけ料理ではなく
ふむふむ やってやりますかと
腕まくりで挑む 食材オールスターズ戦
意外な味の取り合わせに 家族もざわつく
「イケる」の声がかかると
オマケのボーナス点をもらった気がして
「やるじゃんわたし」と自己満足
なんだかんだ こうやって
何につけても こうやって
ちよっとお得な気分を
わざと演出してでも 楽しむことが
キャンペーンをモノにする
極意なのかもしれない

記憶

森本恭子

我が家の小さな家の中で
時々かくれんぼが 繰り広げられる
隠れる所は 思いがけない場所で
かなり難易度が高い

「もう いいかい」「まあだだよ」

なかなか見つけてあげられないときは
やり終えていない宿題のように
ずっしり私の上にのしかかる

「もう いいよ」

その言葉が迫ってきて
その言葉が頭の中を駆け回る

身じろぎもせず見つかるのを
独りぼっちで待ち続ける彼の姿は
セピア色に色褪せた思い出の彼方
「また 会えてよかったよ」
もう一度 そう伝えたいのに
それを口にできないのがもどかしい

「今ここにいるよ」

そう叫ぶことすらできない彼は
見つけてほしいと泣きながら
今日も私を待っているだろう
彼の涙の匂いが鼻腔を貫いて
胸の奥までじんわりと痛む

記憶は彼方へ 吸い込まれていき
影すら残してくれない
はるか向こうへ迷い込んで
頭の役目をなくしたように
記憶という箱の中に彼は存在するはず
遠くの記憶よ 早くこつちに来てい

「もう いいよ」

押入れをそろりと開けると
去年しまった白いコートを拾い上げた
「ねえ 僕のこと憶えていたね」
羽織ってみると何だか照れくさくて
私は彼の視線を静かに受けとめた

【短歌】

◎岡山市長賞

わが庭より旅立ちゆけり油蟬鶏頭の葉をつかむ抜け殻

鈴木雄二

◇岡山市教育委員会教育長賞

笛を提げて法事に甥が来る額のあたり父に似て来し

岩崎弘舟

雷雨去り窓より涼風吹き入りてギリシア哲学少しずつ読む

金光稔男

満天の大夕焼の消ゆるまで妻も来て立つ二階のベランダ

三好英男

読み止しの今日のページの葉にと散り敷く銀杏の黄の葉を拭ぶ

吉見節子

【俳句】

◎岡山市長賞

冬ぬくし影ながながと肩車

堀家正子

◇岡山市教育委員会教育長賞

血の色の絵も語り部や原爆忌

小嶌節子

秋高しはみ出すほどに夢と書く

時實育代

献体の面接終へる小春かな

櫛本信義

連弾の姉妹の指に薔薇香る

名木田純子

【川柳】

◎岡山市長賞

ふるさとの地図にむかしを遊ばせる

田辺卓樹

◇岡山市教育委員会教育長賞

返納に未だ背いて過疎の足

秋山順子

足すことも引くこともある夫婦仲

太田睦美

特別でなき「特別」の夏を生く

安井節夫

未来へと羽ばたけ不戦の千羽鶴

佐々木幸男

【随筆】

◎岡山市長賞

#Me Too

佐藤陽子

男が苦手だ。

子どもの頃は男だ、女だ、の好き嫌いはなかった。こうなったのは就職してからだと思う。

最初の勤め先は出版社だった。後で知ったことだが随分な競争率だったらしい。場所も銀座だったので人気があったのだろう。なぜ私が合格したのかという編集長の好み、だったらしい。これも後で知ったことだが。

制作現場は過酷で深夜にまで仕事が及ぶことがある。その後は必ず慰労の飲み会になる。直属の上司である編集長は「このあと、どこかに二人で行きませんか」と私を誘う。私は酷くうろたえながら失礼がないように慎重に断りのセリフを考える。これが疲弊した心身に堪える。自分のポジションの確保とともに意思表明をさり気なくも、毅然と伝えなくてはならない。しかも自分にも相手にも不利益にならないように。若い私は苦しんだ。

のちに移転した岡山でも同様なことが続いた。勤め先の上司と挨拶回りで一緒に車に乗っていた時「このままホテルに入っちゃったりして、そしたらどんな」とハンドルを握りながら上司が尋ねてきた。「全部失くしますよ。地位も名誉も家庭も。訴えますから私は。止めた方がいいですよ」と冷静に仕事のトーンで答えた。私はいつの間にか非礼な言動に対処する度胸を身に付けていた。それから数年後にセクハラ（セクシヤルハラスメント）という言葉が社会に現れた。

先日、女性ばかりが集まる習い事の教室で「#Me Too」が話題になった。彼女らは口々にミーツウ、ミーツウと勢いよく手を挙げた。いつもは無口で控えめな専業主婦が「私なんて、おっぱい触らせろって言われて触らせといた。減るもんじゃなして」。人柄からは想像もできない発言だった。

セクハラへの警戒心は服装にも表れる。海外の映画で大きく胸の開いたトップスで堂々としている学校の教師を見ると驚く。日本では胸の谷間はNGだ。とにかく見えてはいけない。だから見えなくするために下着じゃないみたいな下着が売れる。さらに胸を小さく見せる下着も開発され売れる。女たちは誤解されたくないのだ。勘違いされたくないのだ。女は男にスキを感じさせてはいけない。男の価値観が先行しているからだろう。

「こんなに色気のない女性は珍しい」と年配の男性に言われる。「色気は大事」とも。私もそう思う。彼の言うそれは性欲に基づいた色気ではないことも承知している。だが悲しいかな、長年の会社勤めは男社会の中で性的嫌がらせに遭わない攻防法を私に覚えさせた。

それは、一にも二にも喧しくすること。不本意だが、向こうつ気の強い、味もそつけない毒気のあるバサバサした女であると思わせること。これが確実で手っ取り早い。

本当は美麗な装いで私らしく口数少なく、おしとやかに艶のある風情でいたいのに。

母のいた時間

平 元 薫

夫は、ずっと、自分が「母のいた時間」を知らないと思っていた。でも、夫の身体、はしつかりと「母のいた時間」を覚えていたのだ。

梅雨時、やつと私は、昨年三十三回忌の法要をすませた実母の和箆笥の中を整理した。形見分けの後、残していた物をこのままにしているのは目に見えている。処分しようと決めた。しかし、覚えのある水色の着物だけは捨てづらく、思い切ってリメイクすることにした。

縫い物は、あまり得意でない。でも、時間だけはたつぷりある。図書館で、手縫いで出来るという超初心者向き着物リメイクの本を借りてきた。失敗して元々と、この本を見ながら、私のチュニックに作り替えることにした。

勝手に、リビングの片隅を私の作業コーナーにした。まず、必要なところのみ、着物をほどいていく。和裁も得意だった母。この着物も自分で縫ったのかなあ、知っているようで本当は何も知らなかったなあ、と母のことを考えながら縫い目をほどこ。床に着物を直置きにして、型紙がわりの新聞紙をあて、まち針をうつ。そして、思い切って裁ちばさみを入れた。ああ、もう元にはもどらない。

その後は、チクチク手縫いをしていく。この水色の着物、私の入学式や卒業式に黒の絵羽織と一緒に着ていたなあ、と母のいた時間をいとおしく思いながら、うつむいてただ針を動かす。

そんな時、同じ部屋にいた夫がふつとつぶやいた。「この感覚、なんか覚えとる。ようわからんけれど、こんな感じ味わった事がある気がする」

私は、あつと思つた。それって、今まで忘れていた、夫の一番古い記憶だ。夫の母は、和裁や洋裁が得意でよく頼まれ物をしていたという。きつと、小さな息子を遊ばせながら、縫い物もしていたのだろう。針を動かす母の側で、安心して過ごしていた幼い頃のことを夫の身体は思い出したのだ。

夫は、二歳八ヶ月の時に実母を亡くしている。顔も全く覚えていないという。実家には写真も残っていない。結婚してはじめて伯父に、赤ちゃんの夫がふつくらとした母に抱かれている写真をもらった。この写真でしか母とのつながりはないと思つていた。しかし、今彼が味わっている感覚。これは、夫の身体がしっかりと覚えていた、母のいた確かな時間の証だ。

思いかけず、身体が覚えていた母と過ごした穏やかな時間。潜在意識の奥にそつとしまわれていた時間。きつと、その大切な時間の温もりが、夫のその後の六十年を支えてきてくれたのだろう。そして、これからもずっと支え続けてくれるに違いない。

追記。無事、私のチュニックも完成した。

◇岡山市教育委員会教育長賞

カラスのお告げ

長 島 恵美子

七月初めのごみ収集日の朝、出合い頭の主婦と、同時に目を見張った。カラスが袋をつつき生ごみが道に散乱している。

居合わせた3人で清掃した。ひとりが「最近、上の電線にカラスが十羽ほど止まっていてごみ出しが怖い」とも言う。たまたま誰かがごみ袋に網をかけずに放置したのかと思ったが、次の収集日も同様の事態となった。

狭い市道をはさみ斜め向かいの収集場所を、五十軒ほどが利用している。周辺の立地からして、拙宅の勝手口から最も見通しが良い。収集後に網を畳む当番はいるが、私より十五歳ほど年上のTさんとIさんが、今までよく管理してくださっていた。が、この状況が続くようであれば、見通しが良い私が対策を考えねばなるまい。

インターネットでカラスの習性を調べる。人間が七色に見える虹は十何色まで識別できる。七歳児ほどの学習能力があり、異変に敏感。他の群れにまでコミュニケーション能力があり、人間の顔を覚える。黄色が苦手だが、透けて見える袋や網に効果はない：撃退グッズは多々あるが、道端では使いにくい。

次の収集日に観察していると、せつかく町内が交換してくれた丈夫な網を、二匹が器用に口ばしで持ち上げ袋を引きずり出しているではないか。電線にも見張り役なのか数匹居る。私が黄色の傘をさし、黄色のタオルを首にかけ道に出て睨むと、すべて逃げ去った。

さて、次の収集日。無花果を守るため知人が自転車チューブで作ってくれた蛇のおもちやを、畑から二つ持ち帰り設置した。私も遊び心でカラスと知恵比べだ。小学生や主婦が珍しそうに眺めて通る。いい案かと思ったが、時々設置場所を効果的に変えねばならない。そして、次の収集日には、なんと一つが持ち去られたのだ。

結局、キラキラテープを網と周辺に取り付けることで、カラスの鳴き声すら近くで聞こえなくなった。反射光が苦手らしい。

月末には、すっかりカラス騒動は治まったのだ。その間、カラスを通じて思わぬことに名も知らなかった方々と会話が出来た。亡き母が親しくしていただいた方とは、九月になり農家にピオーネを買いに行く約束もできた。

新型コロナウイルスでソーシャルディスタンスをとりながらも、不安と恐怖の中で人とのつながりを持ち、人の役にたきたいと願う人が増えたとも聞く。

今朝も夜明け前から遠くカラスの声が聞こえる。京山から東へ高く空を飛び立つ群れ。先月の騒動は、「そろそろ地元を目を向け、亡きお父さんに習い近隣に尽くしなさい」というカラスのお告げだったに違いない。

賢いカラスは私を黄色の不気味なおばさんがいる収集場と仲間に告げたらう。近くの方には最近、ごみ置き場の監視を始めたおばさんと認識していただいたかもしれない。

貴重な気付きのあったコロナ禍の夏。

そうめん

森 本 恭 子

どんよりした雲が広がる、梅雨の明けきらない蒸し暑い七月のある昼下がり、食欲も気力も減退気味で脂っこいものや、ボリュームのあるものが食べきれそうもない時に重宝するのが、夏の定番、そうめんだ。

子どもの頃、夏休み中の昼食はそうめんが群を抜いて多く、母がそうめんを茹でている後ろ姿を見るとワクワクしたものだ。家族皆でテーブルを囲み、そうめんをすすする。めんつゆに大葉やネギ、ごま、ウズラ卵にきざみ海苔、大人はワサビを入れて、そうめん専用の透明ガラスの器に氷やトマトやきゅうりを盛ったそうめんは、ご馳走感あふれたものになって、子ども心にとっても嬉しかった。

このことが頭の片隅にあったのか、その日はそうめん売り場へ一直線に向かった。棚には何種類ものそうめんが並び迷っていたところ、傍に、存在感抜群の見恨れない玩具が一台置いてあった。パステルカラーの珍しいデザインで、商品名を見ると、『家庭用そうめん流し機』とある。名前のとおり、家の中でもそうめん流しの気分を味わうことができ、お独り様でも少人数でもどうぞと説明文にある。数分ためらったが、そうめん流しのフリーズに心惹かれて、買うことに決めた。

そうめん流しと言えば、小学生の頃、旅先で昼食に食べたことを思い出す。やや古びた円卓で、スイッチを入れると人工的に水流を作り、くるくると水中でそうめんが回る仕組みだった。今思えば、玩具のような作りだが、野外の得も言われぬ開放感のなか、家族の大切なレジャーの思い出として記憶されている。その後も、色々なそうめん流しを体験したが、やはり一番思い出に残るのは、回転式のそうめん流しだ。だからだろう、その時の高揚した気分をもう一度蘇らせたかったのだと思う。

持ち帰るとき、プラスチック製で軽いものの、箱に入ると大きさはひと抱えもあった。帰宅して、早速試してみる。そうめんを茹でて水をきりザルに置き、山の形になったつぺんからそうめんを少しずつ流していく。冷たい水に乗って流れてくるそうめんを、一生懸命に箸ですくい、麺つゆにつけて食べるだけの作業だが、このすくいとるまでの時間が何よりのごちそうだ。初めての試みだったが、我が家は束の間、小さな夏祭り気分で盛り上がり、それはどこか新鮮な気持ちで、心が満たされるのを感じた。

いつか後片付けが面倒になり、倉庫に入って使わずじまいになる日が来るかもしれないが、人生楽しんだもの勝ちという、先人たちの知恵を優先したい。日常に追われるなか、巡りゆく季節に寄り添って暮らす生活を我流に楽しむことに魅力を感じるのだ。家族の心を豊かにしてくれた魔法の玩具と、素朴なそうめんの食感と風味を、大切に取り伝えていきたいと思う。生涯で食べて楽しむものに限りがあるが、経験すること、人生が一回りも二回りも豊かに楽しくなるものだから。

傘寿讃

金 光 章

つい先日僕は八十歳の誕生日を迎えた。いつも誕生日にさほどの感慨を持つことなどないのだが傘寿の今年ばかりはなんとなく嬉しい。大病に煩わされず、特別苦境に出くわすこともなくここまで来たことを感謝したい。

勝手気ままに生きてきたからその分両親、家族、親族に迷惑、負担をかけたことだろう。それらを代表して母親に花束を贈り、父親とは乾杯を交わしたいなどと考えていたら、近くに住む娘が「お父さんお祝いに食事会しようよ」と誘ってくれた。

「やろう、やろうどこの店がいいかな」

僕は大乘り気だったが、家人が

「あなた本気なの、今どき年寄りが五人以上集まって飲み食いしていいと思ってるの」とストップをかけた。コロナは怖い。久々に大学生の孫息子二人と一杯飲める楽しみは吹っ飛んだ。その代わりだろう。当日、孫が「おめでとう」と電話をくれた。

「僕は君らの年齢の時、自分が八十歳のお爺さんになることなんか考えもしなかった」

「あつという間に年を取るぞ」

説教になりそうで僕は慌てて口を抑えた。

僕の老人像には祖父の印象が強く残る。

祖父は戦争中小さな村の村長だった。それが災いして敗戦と同時に公職追放を余儀なくされていた。それが主因と思うが以後、公職は無縁のこと、草抜き一つ仕事に従事しなかった。典型的な隠居生活だ。終日自室に閉じこもり多分新聞でも精読していたのだろう。後にテレビ放送が始まると誰より早く受像機を買求め、終日画面にかじり付いていた。それでいて存在感は家中に充滿し、祖母は息をするのさえ氣遣っている様子が子供の目にも分かった。僕ら子供は隣家に住んでいたが、祖父の家へ行くと抜き足差し足、用件もそこそこに逃げ戻ったものだ。今の僕も同じ隠居の身だが人格の重みが異なる。あの威厳は僕にはとても遠い。苦笑するほかない。

それはさておき、諸行無常。つくづく時代は変わるものと実感する。祖父のいた頃、父と暮らした頃、身の回り全てが変化した。社会環境の変化は家族のあり方にも影響を与え、生活技術は激変した。

時折自分は社会から少し遅れていることに氣づかされる。僕は携帯用電話機を持ったことがない。必要がないから欲しくもないのだが、いつの間にかこれが世間一般では生活必需品に昇格していても生活を侵食していることに氣が付く。

家人がいい例だ。僕の目にはスマホに追いまくられているように映る。この人はスマホがないと生きる中心を失うのではないかさえ思ってしまう。なのに社会はスマホを持つことを前提に社会的サービスを進めている。

人より早く情報を得て何になる。社会の便利に使われるのは遠慮したい。どうせ当方は隠居の身だ。なるべく新奇なこと引きずられず、天然自然と親しんで、素朴に生きたい。今そんなふうに関き直っている。